



## 一 道路現場にて

太陽が全ての物から水分を奪わんばかりに、地面を容赦なく照りつける。陽炎がゆらめき、景色がムンクの叫びに変形していく。

ここは道路の工事現場。辺りは土と石と雑草だけだ。ガー。ガー。ガー。ブルドーザーが親の敵のように土石を驚掴みにすると、ダンプカーの荷台に投げ捨てる。タイヤごと沈み込んだダンプカーはもう二度と戻って来るものかと叫びながらタイヤを軋ませ走り去る。ブルドーザーやダンプカーが動くたびに、生命なんてこんなところにいるものかと土ぼこりが舞う。颯爽と走る車を描いた道路完成予想図は土まみれで姿は消えている。天国に行く前にはまず地獄の門を通らないといけないことを示しているのだ。

「みんな。十二時だぞ。休憩だ」現場監督はそう叫ぶとともに、東の間の天国を楽しむために現場事務所に走り込む。作業員たちはその声を聞くと、待っていましたとばかりに、作業中でも無理矢理に区切りをつけると、監督を先に抜かないように背中を追う。作業員の中で、一番若いあんちゃんが先輩たちが事務所に入るのを見届けると草むらに向かう。トイレが我慢できなかったのだ。ジッパーを下ろそうとするが、ズボンが汗にまみれてなかなか下りない。ようやく黄色い虹が草むらに弧を描く。体中から水分が放出されたせいだ、いつもよりも黄色の濃度が濃い。まるで、危険信号だ。

「ふう」東の間の安堵のため息。あんちゃんから放出された虹は荒れ果てた大地にささやかなおしめりをもたらした。そのおしめりもぎらつく太陽の前ではすぐに蒸発し、アンモニアの臭いがあんちゃんの鼻を突く。

「くせえ。でも、もうちょっとで漏れそうだったんだから仕方がないか」己のささやかな象徴を誇示したまま、最後の点滴が完了するのを確認すると作業ズボンに急いでしまい込む。

「おい、何やってんだ。早く来い。飯にするぞ。そのままいたら暑さで死んでしまうぞ」現場監督が事務所の窓を開け、あんちゃんに向かって叫ぶ。ただし、その声からは、あんちゃんを本当に心配しているのか、死んでもいいのと思っているのかはわからない。ただ、もう一度叫ぶことが苦痛なのはその歪んだ顔からわかる。

「今、すぐに行きます」声を出すと熱風が口の中を襲ってくる。あんちゃんはできるだけ口をすぼめると監督の待つ事務所に向かう。その時、安全靴の先が何かを蹴り飛ばしたことには気づかなかった。

あんちゃんが事務所に入ってしばらくすると、あんちゃんが放出した虹の辺りに、黄色い煙が湧き起こると人影が生まれた。

「ふう。また、元の姿に戻ることができたでござる。それにしても、ここはいつの時代でござるか。前は確か……。それよりも、この生温かさは何でござるか。それに、臭い。これはおしっこでござるな。拙者に小便をかけるとは不届き千番でござる。そんな奴は成敗してやるでござる」

草むらの中からは、体中に矢が刺さり、鬚が落とされ、ざんばら髪の男が現れた。落武者だ。落武者は刀をゆっくりと鞘から抜くと辺りを見回す。暑い。空全体が太陽に覆われているみた

いだ。額から切り傷の血と一緒に汗が流れ出し、歌舞伎の隈取りのような顔になる。

「わしに小便を掛けたのは、あ奴か」落武者はブルドーザーを見つけた。「馬か。馬が体中に鎧を着けておる。それに、いやに大きいでござるな。こんな大きな馬は初めて見たでござる」

落武者は刀を正眼に構え、すり足で、用心しながらブルドーザーに近づいていく。

「いやあ、事務所の中は天国ですね」

事務所に最後に入って来たあんちゃんはタオルで顔を覆う。タオルはすぐに洪水となり、端から汗がしたたり落ちる。それを洗面台で洗うと、再び顔に乗せる。また、洪水だ。それを洗う。その繰り返しは何回も続く。汗が引く様子がない。

「今日は、ほんとに暑いですよねえ。汗どころか、血まで噴き出てきそうですよ。何時間も太陽に照りつけられたら、ホント、気が狂っちまいますね」

あんちゃんは先輩の作業員に毒づく。

「ほんとだな。休み時間中に冷凍室に頭でも突っ込んでおくか」

先輩の作業員は真夏のセミの声のように騒いでいるクーラーがぎんぎんに効いている部屋の中で、少しでも早く体を冷やしたいからなのか、ビニール袋に入った氷を顔、喉、胸と順番に体に押し付けている。

「そりゃ、いい案ですね。でも、冷凍室に頭を入れても、大丈夫なんですか。死にませんか？」

あんちゃんが真顔で答える。すぐにでも実行しそうな勢いだ。

「冗談だよ。あんまり暑いで冗談でも言いたくなるだろう」先輩がおまえはバカかというような顔で笑った。

「はあ」あんちゃんは折角登ったはしごを外され、次の言葉が見つからない。

「冗談じゃない奴がいるぞ」

現場監督が部屋の中から窓の外を指さした。そこには、体中に矢が刺さり、刀を振り回しながら、ブルドーザーに決闘をいどんでいる男がいた。

「とうとうこの暑さでキ印になっちゃったか」

「まさか。でも、時代劇のロケにしては変ですね」

「時代劇のロケ？俺はそんな話は聞いていないぞ」

現場監督が窓を開け、「こら、何してんだ」と怒鳴るが、すぐに「ごほ、ごほ」と咳込む。体温以上に熱せられた空気が現場事務所をゾンビのように襲ってくる。急いで、窓を閉め、クーラーの前で冷たい空気を肺の中に吸い込む。ブルドーザーと格闘している男には監督の怒鳴り声が聞こえなかったのか、こちらを見ようともしない。

「あいつ、テレビの時代劇の落武者の姿ですね」あんちゃんは口の中をもぐもぐさせながら現場監督の後ろに立った。片手にはコンビニのおにぎりを持っている。

「あまりの暑さで、どこかの施設か、どこかの家の座敷牢からでも逃げ出したんだろう。逃げ出したのはいいけれど、まさか、落武者のかつこうとはなあ。とにかく、お前、あいつをなんとかしろ」

現場監督は顔をしかめながら、クーラーの前から振り返った。

「ええ。俺ですか。俺、落武者は苦手なんですけど」

「落武者が得意な奴なんかいるものか。なんでもいいから追っ払って来い。どうしてもダメなら、警察を呼べばいいんだ」現場監督は自分の席に戻ると、愛妻なのか悪妻なのか、の弁当を広げ始めた。あんちゃんにとって現場監督は悪代官以外の何者でもない。

「まだ、昼飯を食べていないんですけど・・・」

「何か、言ったか」現場監督は箸を止め、顔を上げると、ぎょろりとあんちゃんを見つめた。もうこれ以上何も言わせるなという顔だ。

「いえ、何にも。今から、行ってきます」あんちゃんは半分齧りかけのおにぎりを口の中に押し込むと、一息に飲み込んだ。

「ちえっ。監督はいやなことはいつも俺に任すんだから。この前だって、野良犬がうろついていたら、追い払えって。俺、犬が大嫌いなんですって言ったら、俺も犬が大嫌いだって言うし。仕方がないから、犬に向かって石を放り投げたら、犬には当たらずに、石は飛んで行って、近所の家の窓ガラスを割ってしまったもんなあ。窓ガラス代を弁償したら、その日の日当がふっ飛んでしまったよ。おまけに、監督には、お前、何をしたんだ、と怒鳴られるし。飛んだり、損したりだ。あーあ。下っ端はつらいよ」

一人、文句ごちのあんちゃんだが、監督に不平不満を言おうものなら、仕事をクビになってしまう。折角、見つけた仕事だ。ここは我慢。我慢だ。

「ひい。外はやっぱり暑いなあ。体が冷えた分だけ、よけいに暑く感じるなあ。それにしても、折角の昼休みをあんな奴のために使うなんて」と文句を垂れながら、落武者の下に行く。落武者はブルドーザー相手に刀を振りかざしていた。

その背中に向かって、「おい、おっさん。何してるんだよ」と、あんちゃんは唾と一緒に言葉を吐き捨てた。

「しまった。後ろを取られたか。わしとしたことが油断しておったでござる。この化け物との戦いに気をとられすぎていたからでござるな」

落武者はすぐさま振り向くと、あんちゃんに刀を正眼に向けた。

「おっさん。何を侍ごっこしているんだい。そんなおもちゃを振り回して脅そうとしても、俺は怖くないぞ。俺だって昔は、原付を乗りまわして、ブイブイいわしていたんだからな。それにしてもおっさん、臭いぞ。小便の臭いがするぞ。小便ぐらい漏らさないで、ちゃんと公園のトイレでしろよ」

あんちゃんの言葉に落武者は自分の体を匂う。

「やはり臭うでござるか。拙者も気になっていたのでござる。拙者がそこの草むらで寝ていたら、誰かが小便を掛けたのでござる。そやつを成敗してやろうと、今、探しているのでござる。お主は知らんか？」

落武者が真顔で尋ねる。

「そこの草むらで？」

あんちゃんの頭の中に、自分の立ち小便の姿が浮かんだ。

「まさか、草むらに人が寝ていたなんて・・・。おかしいなあ。石コロと草しかなかったはずだけどなあ・・・」

「お主は何かを知っているのでござるか？」落武者があんちゃんの顔色を伺ってくる。

「いやいや、俺は何も知らないよ。そう言えば、どこかのおっさんが、さっき、草むらでござそしていたような気がするけど。まあ、立ち小便をする奴も悪いけど、そんな草むらに寝っ転がっている奴も悪いと思うよ」しらを切る日に焼けた黒い顔のあんちゃん。

「そうでござるか。そのおっさんと言う奴はどちらの方向に逃げたのでござるか」落武者は辺りをゆっくりと見回す。むき出しの土とさっきまで戦っていた巨大な馬、お城のような家、そして、さっきまで寝ていた草むら。人と言えば、目の前のあんちゃんだけだ。

「あっちかな。こっちかな。いや、仕事していたら知らない間にいなくなっていたから、俺、わかんないよ」

目を泳がせながら、何とか誤魔化そうとするあんちゃん。

「お主は何か隠し事をしているのではござらぬか」疑いの目であんちゃんを見る落武者。

「いやあ。俺は何もしらないよ」顔はクロにも関わらずあくまでも心はシラを切り通すあんちゃん。

「まあ、拙者に小便をかけた奴は、おいおい探すとして、この化け物は何でござるか」落武者が刀でブルドーザーを指す。

「それ？それはブルドーザーだよ。おっさん、ブルドーザーも知らないの？子どもの頃、乗り物の絵本見たことないの？俺なんか、絵本を見て、飛行機のパイロットや電車やバスの運転手に憧れたものだけだなあ。夢だよ夢」あんちゃんは空を見上げる。雲が浮かんでいる。見ようによっては、ジェット機や電車、バスの形に見える。

「夢でござるか。拙者の夢は戦国大名になることでござった。名を上げようとし戦っていたら、このようなことになってしまったのでござる」

「戦国時代？あはあん。おっさん、どこかのテーマパークで働いていたんだなあ。仕事が嫌になって、逃げだしたんだろ。俺も仕事が嫌でやめたいと思うこともあるよ。だから、おっさんの気持ちもよくわかるよ。それでも、おっさん、逃げたらダメだよ。いつまでも逃げ通すことなんかできないんだから。人生は挑戦だよ」

あんちゃんは監督の命令には不満だったのに、急に、落武者に対しては正論を吐く。上から目線をされた者は自分より弱い者に対しては上から目線を行う。上から目線は低きに流れるのだ。

「テーマパーク？それは何でござるか」

「おっさん。テーマパークも知らないの。よっぼどの田舎から出てきたんだなあ。ディズニーランドやUSJだよ。まあ、乗り物やショーなんか、いろんな遊びで楽しめるところだよ。まあ、結構、金にかかるけれどな」

「戦場は遊びではござらん。それに、拙者は逃げてはござらん。逃げなかったから、こんなに矢を打たれたのでござる。逃げていたら、こんなことにはなっていなかったでござる」体中に刺さった矢を自慢そうに見せつける落武者。

「それもどうせ作りものだろう」と相手に聞こえないように呟くあんちゃん。

「それはそうとして、この化け物の名はブルドーザーでござるか。馬みたいなものでござるか？」

」

「馬？ そうだなあ、馬と言えば馬だけど、馬みたいには速く動けないから、どちらかと言えば、牛かなあ」

「牛でござるか。お主はその牛に乗ることができるのでござるか」

「いやあ、ブルドーザーの免許は持っていないんで、運転できないんだ。でも、いつか免許は取ろうと思っているんだ」

「免許でござるか。拙者も、自己流無茶苦茶派の免許皆伝まで、あと一歩だったのでござるが、戦に巻きこまれたので、願いはかなわなかったのでござる。免許皆伝さえしていれば、今頃は、大名とまでは言わなくても、中名、いや、それも無理かな、小名ぐらいにはなっていたかもしれんでござる」落武者も空を見上げる。ジェット機と電車とバスの雲が風に流され、その雲は合体しお城の形となった。

「ふーん。おっさんも大変だったんだなあ」

太陽が照りつける中、あんちゃんと落武者は夢について語り合う。

「まあ、今日はそういうことで、大人しく家に帰ってよ。おっさん。特に、そんなおもちゃを振りまわさないで。銃刀法違反で警察に捕まるよ」

あんちゃんはやさしい言葉を掛けて、落武者をいなそうとする。今までおとなしかった落武者が急に刀を振り回し始めた。心が切れたのだ。

「何がおもちゃでござるか。名刀村正に少しは劣る普通刀町正を侮辱するのでござるな。許せん」

急に怒り出した落武者に対し、あんちゃんもすぐに反応して、怒り出す。六秒以内ならば、怒りは伝導するのだ。つながっていた空の雲はばらばらにちぎれて、ジェット機の形も、お城の形も空中分解して消えた。

「俺だって、おっさんを許せんよ。こんなくそ暑い中で仕事していて、せっかく昼休みでクーラーの効いた部屋で涼めるかと思っていたら、また、暑い中に舞い戻って、おっさんの相手をしないとイケないんだからな」

「よし、そこまで言うのならば勝負でござる。拙者の名は、宮本七蔵ござる」

「宮本七蔵？ どこかで聞いたときがあるなあ。あんまり本は読まないから、テレビだったかなあ」

「テレビ？ それは何でござるか。城下町に立つ札のようなものか。それにしても、お主が拙者の名を知っているはずはないはずだが……。まだ、何も大きな手柄は立てていないではござる」

落武者は首をひねる。

「まあ、よろしいでござる。お主こそ正々堂々と名前を名乗れ」

「何が、名乗れ、だ。姿だけでなく、頭の中まで落武者か。とにかく、あっちへ行ってくれ。ここは道路工事の現場なんだよ。このままいて、ブルドーザーに轢かれて、怪我をしても知らないぞ」

「お主らはどちらの味方じゃ。豊臣か。徳川か。答えによっては成敗してくれる」

落武者は、太陽の熱で髪の毛がちりちりとかげつくような中、刀を振りかざしたまま、じりじりとあんちゃんにすり足で近づいていく。

「えいや」落武者が刀を振り下ろした。あんちゃんの首にかけていた汗拭き用のタオルが真っ二つに切れ、地面にばさりと落ちた。暑さと怒りで真っ赤になっていたあんちゃんの顔が蒼ざめた。

「その刀は本物かよ。冗談はやめてくれ。おっさん」とあんちゃんが言う間もなく、引き続いて、えいやの掛け声で、落武者が二太刀目が振り落ろされた。今度は、後ろに括ったあんちゃんの長い髪の毛がばさりと落ちた。落武者と同じざんばら髪になった。

「うわあ。助けてくれ」落武者にため口をきいていたあんちゃんだが、落武者が本気なのがわかると、事務所に慌てて逃げ込む。

落ちない確率百パーセントのジェットコースターよりも、こける確率十パーセントの自転車の方が怖いのである。私たちは安心安全という名の社会で、あぐらをかいていると言ってもよい。

「どこへ行くでござるか。逃げるとは卑怯でござる」

落武者は逃げるあんちゃんを追いかけようとするが、「うっ」と小さな石につまずき、五体投地のかっこうで地面に倒れた。これまでずっと石としてじっとしていたため、急な動きにつま先が上がらず、ささやかな段差にも対応できなかったのだ。その振動で、落武者が現れた石の隣の三段重ねの石も崩れたことに、当の落ち武者を始め、誰も気がつかなかった。